

# 本当、嘘、どっち？

村田 勝 敬

## ■ プロローグ

1995 年は日本にとって“大凶”の年であった。1 月 17 日には M7.3 の阪神淡路大震災が起り、テレビ画面には、橋脚の破壊により、傾き寸断された高速道路の上で大型バスが落下寸前で停止していた。その後発生した火災で神戸市長田区を中心として全体で 7,000 棟近い建物が焼失し、この震災による総死者数は 6,434 名にも達した。また、3 月 20 日には東京の地下鉄路線内でオウム真理教が同時多発テロ（サリン事件）を起こし、首都圏は大混乱をきたした。事件で乗客および駅員 13 名が死亡し、約 5,510 名が重軽傷を負った。幸運にも、私は丸の内線のひとつ前の電車に乗りしていたので被災を免れた。

## ■ 大西洋上マデイラ諸島への旅

1995 年の 5 月、ポルトガル・マデイラ諸島に渡った。この島は首都リスボンから約 1,000 km 南西、モロッコ・カサブランカから大西洋を約 800 km 西方に離れた所に位置し、日本の宮崎・鹿児島とほぼ同緯度である。島の中心はフンシャル市であり、当時人口 10 万人と聞いた。

奄美大島とほぼ同面積を持つマデイラの民家屋根は大半がオレンジカラーで、壁は白色であった。島で最高峰のレイヴォ山は 1,800 m を超え、高原には風力発電機が数多く設置されていた。また、1993 年以降度々訪れているデンマークとスウェーデンの間にあるバルト海にも風力発電機が多数設置されている。秋田県内における最初の風力発電設備の稼働は 1998 年であったので、欧州ではかなり以前より水力・火力・原子力に代わる第四の発電方式が実用化されていたことになる。

## ■ メチル水銀の健康影響

マデイラに行く契機となったのは、フェロー諸島出生コホート研究の 7 歳児調査が行われていた 1993 年に訪れたイタリアの Renzoni 教授が高濃度メチル水銀曝露を示すマデイラ住民の話題を提供されたことによる。その地区住民はマデイラの中では貧しく、島近くの深海で獲れるエスパーダという太刀魚に似た真っ黒な魚を摂食するため毛髪水銀濃度が高いのだという。この島に 1 ヶ月近く滞在し、カマラ・デ・ロボスというフンシャル市西部に隣接する農漁村に



住む小学 1 年生約 150 名のメチル水銀曝露による神経影響を調査した。

フンシャルに住む Zino 医師の紹介で、当該地区の小学校体育館の一部スペースを借り、板で間仕切りして簡易測定室が作られた。日曜日を除くほぼ毎日、7 歳児とその母親を呼び出し、同意書に署名が得られると母子の頭髪採取（メチル水銀の曝露評価用）、そのあと小児神経学的検査、神経行動学的検査、神経生理学的検査が順次行われた。現地病院勤務の小児神経内科医師が雇われ、また現地女子大生がフェロー諸島から来た臨床神経心理士に測定方法を教わり神経行動学的検査をおこなった。視神経および聴神経の神経生理学的検査を実施する部屋にも女子大生 1 名が配置され、脳波電極の装着を含む測定の大略を子どもに説明し、測定は私が担当した。

## ■ 彼の地の衝撃

マデイラでのメチル水銀の曝露評価には母親の毛髪水銀濃度が代用されたが、子どもに有意な神経発達影響との関連が観察されたのは神経生理学的検査成績のみであった。フェロー諸島では胎児期メチル水銀曝露と神経行動学的検査成績との間でも有意な関連が見出されたが、現地女子大生によって行われた神経行動学的検査では認められなかった。やはり熟練を要する検査はその道の専門家によって実施されるべきであったが、マデイラでは言語の壁が障碍となった。

ある日、測定をしていると小児神経内科医が私を呼んだ。彼は腹部や背中にカフェ・オ・レ斑のある子どもを指差し、「この子は恐らく神経線維腫症に罹

っている」と教えてくれた。マデイラにはこの遺伝性疾患を持つ患者が高頻度なのだそうだ。別の日、私が子どもの頭に脳波電極を装着するため酒精綿で頭皮を擦っていると、頭髮の間を動く白虫に気付いた。それは、幼い頃猫毛を撫でていた時に見たしらみ(虱)に似ていた。動かす手が一瞬止まり、身体に虫酸が走った。現地女子大生に尋ねると、やはり虱だと言う。思い起こせば、測定をおこなっていた体育館の片隅に虱の駆除法を書いた張り紙が掲示されていた。帰国前に現地スーパーで虱殺虫剤入りシャンプーを購入し、6月初めの帰国当日、そのシャンプーを用いて遮二無二洗髪した。

### ■ 本当、嘘、どっち？

私達が小学校体育館で日々測定していると物珍し気に子ども達が窓越しに覗き込む。ある日、海を見下ろす玄関前近くで調査スタッフと子ども達の集合写真を撮ることになった。学校にいた1年生から6年生までの子ども達が集まってきた。

クリスティアーノ・ロナウドという名前を私が知ったのは、サッカー熱の流行に加え、英国マンチェスター・ユナイテッド(マン・U)の欧州制覇の話題が出るようになってからである。1985年生まれの彼は11歳までフンシャルで過ごし、その頃、サッカー少年だったという。5年前、諸用あって当時の写真を眺めた。すると、サッカーボールを腕に抱えている少年がテレビ画面に映るクリスティアーノ・ロナウドの顔と徐々に重なってきた。私はマン・Uの公式サイトを検索し、彼に写真添付メールを送った。「この

サッカーボールを持っている少年は貴方か？」と。残念ながら、彼は私に返事を書かないまま、レアルマドリードに移籍してしまった!!

### ■ エピローグ

1995年秋になってもサリン事件の爪痕はあちこちに残っていた。聖路加病院救急医療班の先生を介して、サリン事件後半の被害者18名にご協力頂き、サリンの神経影響を検討することになった。参加者のひとり「世のため、モルモットになりますから、どうぞお調べ下さい」と諦念にも似た悲痛な面持ちで話された。また、仮死状態で病院に搬送された被害者やこれから訴訟を起こすと語っている被害者も参加して下さった。半年後の自律神経機能は事件発生直後に聖路加病院で調べられた血清コリンエステラーゼ値と関連し、また認知判断機能を表すP300潜時と視覚誘発電位潜時は対照群と比べて延長していた。テロの影響(後遺症)は心的外傷後ストレス障害(PTSD)として、ヒトの神経に長く記憶される可能性も示唆された。

2011年に発生した東日本大震災の残像は幼な子にPTSDを引き起こしたと言われている。このような集団の神経や心の変化を、感傷に浸ることなく、数値に置き換え記録することは研究者として重要な使命であろう。だが、一人ひとりの異なる心のインパクトに耳を傾け、共感し、対処できるようになることも人間としてもっと大切なことなのかもしれない。

「秋大生活のひろば」No. 145 (2013年11月刊)



Elementary School at Camara de Lobos